

# 1950, 60年代のモンゴル長編小説における1932年武装反乱 (1950, 60-аад оны үеийн монгол роман дахь 1932 оны зэвсэгт бослого)

佐護 愛

(SAGO Ai)

東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程

(Graduate School of Global Studies,  
Tokyo University of Foreign Studies)

モンゴル人民共和国で1929年以降、聖俗諸侯や富裕牧畜民からの財産没収、牧畜経営の強制的集団化、仏教弾圧などの極左偏向政策が急進的に進められた結果、政策への反発から反乱が頻発した。その最も大規模な武装反乱が1932年4月にフブスグル県ラシャント郡の寺院で始まり、アルハンガイ県やザブハン県などへ拡大した。一般の人民や党員役人も多く参加したこの反社会主義的反乱は、後の社会主義時代の公式の歴史で、革命後に権限を剥奪された仏教勢力や封建諸侯といった反革命分子が革命政府を滅ぼすために極左偏向政策期を利用して起こしたものであると結論付けられていた。

この反乱は鎮圧直後から様々な文学作品の題材として扱われてきた。本発表では、1950, 60年代に発表された人民革命前後の歴史を題材/時代背景にした長編小説における反乱の描写を取り上げる。

社会主義時代の公式的歴史に即した描写として、人民の敵である旧支配勢力と彼らの残酷な行いを憎んで立ち上がる人民という対立構造があり、反乱の鎮圧は革命政府と人民の正当性や優位性を象徴するものである。また、反乱軍がパンチェン・ラマや日本に支援を求める場面も差し込まれる。これにより、反乱鎮圧後まで物語が続く作品では、モンゴル内部から国外の敵、とりわけ反乱を陰で指導した（とされていた）日本との戦いへと移行する転換点として位置づけられる。

一方で、1932年反乱の描写の全てがイデオロギーに従ったものとは言い切れない。反乱軍側の登場人物の発言や、反乱軍と人民側どちらの側にも入らない人物の存在などからは、イデオロギーの枠内にとどまらない作家個人の反乱への姿勢が垣間見えるものもある。反乱に関わる人物表象や物語の展開上の位置づけなどの観点から、B.リンチェン『曙光』(Б.Ринчен “Үүрийн туяа”)、Ts.オラムバヤル『苦悩と幸福』(Ц.Уламбаяр “Зовлон жаргал”)、Ch.ロドイダンバ『清きタミル川』(Ч.Лодойдамба “Тунгалаг тамир”)などの作品を比較し考察する。